サムエル記下 7 章 1～29 節

2025 年 8 月 6 日(水)

はじめに

本日はサムエル記下 7 章 1～29 節を学びます。ここは、主なる神が預言者ナタンをとおしてダビデと契約を結び、ダビデ王朝を創設することを約束した箇所です。

前の 5 章では、ダビデがイスラエルとユダの王になったこと、それに伴いエブス人の町＝エルサレムを攻略しダビデの町とし、そこに王宮を造ったことが語られていました。エルサレムが全イスラエルの政治的な中心となっていくのです。

それを受けて 6 章では、ダビデがエルサレムに「神の箱」＝「ケルビムの上に座す万軍の主」の御名によって呼ばれる神の箱」を運び上げたという記事でした。「神の箱」は、神の御臨在を示すものですから、それをエルサレムに運び上げるとは、エルサレムが全イスラエルにとって宗教的な中心になるということです。

こうして 7 章では、ついに主なる神が、預言者ナタンをとおしてダビデと契約を結び、ダビデ王朝を興すことを約束してくださるのです。その意味で 7 章は 5 章から始まる記事のクライマックスにあたります。

I サムエル記下 7 章 1～29 節の話の流れ。

本日の個所の話の流れを見てみましょう。全体は、新共同訳の小見出しにありますように二部構成です。まず 7 章 1～17 節では、預言者ナタンがダビデに主の言葉を告げた記事です。ここで主なる神はダビデにダビデ王朝を興すことを約束するわけですが、続く 18～29 節は、ダビデの祈りの言葉です。このように 7 章は二部構成になっています。

1. 7 章 1～17 節 預言者ナタン、ダビデに、主がダビデ王朝を興すという御言葉を告げる。
2. 7 章 18～29 節 ダビデの祈り。

II. サムエル記下 6 章 1～23 節の解説

【1 節】

「王は王宮に住むようになり、主は周囲の敵をすべて退けて彼に安らぎをお与えになった」とあります。この御言葉は、二つのことが一息で語られています。一つは、ダビデ王が王宮に住むとは、その支配が周辺に及ぶことであって、王権の確立です。これは人間の業を見つめてのことです。しかし後半では、「主は・・・安らぎを与えた」とあって、神の御業を語っています。こうしてダビデの王権の確立は、主なる神が周囲の敵をすべて退けたことによるといっているわけです。あるいは、主なる神は、ダビデの王権を用いて支配しておられるということです。このように、この御言葉は人間ダビデの業と主なる神の御業が一息に語られています。これは、主なる神とダビデが正しい交わりに立っているからなのです。

ところで時系列的に言えば、人間であるダビデ王が周囲の敵と戦い、勝利するのはこれからのことであり、聖書テキストで言えば 8 章や 10 章になってからです。つまり未来のことなのです。しかし主なる神がダビデに「周囲の敵を退けて安らぎを与えた」といって、先取りの「安らぎ」を語っているのです。つまり神の御業が先に語られ、その後で人間であるダビデ王の働きが語られ

ていくわけです。ダビデの王権は主なる神の御支配の現れだからです。

またここにいう「安らぎ」とは、これまでのダビデの歩みを考えると、すでに与えられた神の恵みでもあります。ダビデはこれまでサウル王の追撃から逃げ回りました。またダビデは、西から攻めて来るペリシテ人、東から攻めて来るアンモン人、そして南から略奪にやってくるアマレク人の脅威とも戦いました。そうした歩みを思うと、今、王宮に住むようになったのは、主なる神がダビデに安らぎを与えたということに他なりません。こうしてこの御言葉は、主なる神が、過去においても未来においても、ダビデの王権を確立し安らぎを与えるという恵みを告げているわけです。

【2～4 節】

ここは、ダビデ王が預言者ナタンと対話した場面です。預言者ナタンが突然、登場しています。歴代誌上 29 章 29 節を参考にすると、ダビデの時代には、サムエル、ナタン、ガドという預言者たちがいたことが分かります。またサムエル記上 19 章 20 節によれば、おそらく、サムエルの拠点の町であったラマにはナヨトというところがあり、そこにはサムエルをはじめ「預言者の一団」がいたのでしょう。その中にナタンやガドがいたと思われます。いわばナヨトには、サムエル学派のような集団があったのでしょう。彼らはダビデ王に主の言葉を告げる役目を負っていた者たちです。だから王のいるところには、預言者たちもいると思ってよいのです。

そこでダビデは預言者ナタンに次のように語っています。「見なさい。わたしはレバノン杉の家に住んでいるが、神の箱は天幕を張った中に置いたままだ。」これは、ダビデが自分は立派な王宮に住んでいるが、主なる神は昔ながらの天幕におられ、粗末なままではないか、ということです。そこからダビデは主なる神のための住まいである神殿を造らねばならないのではないかと思ったわけです。これは、非常に素朴な疑問です。

そのことは例えば、ダビデの子ソロモンが神殿を造り、それを奉献する際の言葉と比べるとよく分かります。ソロモンは、神殿を建立しましたが、「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。」そのようにいっています。列王記上 8 章 27 節の御言葉です。ここにはダビデの素朴な思いと違って、いわば神学があるのです。ソロモンは、神が創造主であって超越的な存在であることをよく理解しているわけです。しかしダビデは、非常に素朴に神の神殿の心配をしているわけです。ダビデにとって、またイスラエルにとって神殿建設は初めてのことです。ですから世俗の王国が王宮と共に神の神殿を建設しているのにならって、自分もまた神殿を造られねばならないのではないか、といっているわけです。当時の国々は、その国の守護神を必ず持っているからです。

それに対して預言者ナタンは、ダビデの思いのままに実行するとよいといっています。それは、主がダビデと共におられるからです。

しかし興味深いことに、その夜、幻の内に、主なる神が預言者ナタンに臨んで御言葉を語るのです。「夜」と「幻」は、神顕現の形式の一つです。人間の活動が無くなる夜、幻の内に神は御心を啓示するのです。それが 5～16 節まで語られています。その要点は、「あなたがわたしのために住むべき家を建てるのではなく、わたしがあなたのために家を興す」ということにあります。つまり先走って申し上げれば、ダビデは当時の世俗的な国家にならって神殿を創ることを構想しますが、主なる神は、何と、この世界の歴史の只中にダビデ王朝を創設し、それによってイスラエルと周囲の世界を永遠に支配する、というのです。

まず 5～7 節です。ここでは、主なる神は御自分が、出エジプト以来、「家に住まず、天幕、すなわち幕屋を住みかとして歩んできた」といっています。つまり主なる神は、イスラエルの民と共に歩み、導いてきたと告げています。その間、神殿のような神の家を建てるように求めなかったといっています。それは、主なる神が異教の神々とちがって、神殿の中に固定されるのではなく、御心のままに、自由にイスラエルの民と共に歩むみ、自らが神であることを示す方だからなのです。新約聖書の言い方にならえば、主なる神は、インマヌエル＝人間と共に歩む神なのです。その上で 8～11 前半までで、ダビデに対して「安らぎを与える」という約束をしています。以下箇条書きにします。

- ①主なる神がダビデを、神の民イスラエルの指導者とした。
- ②主なる神は、ダビデがどこへ行こうとも共にいて、敵をことごとく断ち、名声を与える。
- ③主なる神がイスラエルの民を一つの所に植え付ける。
- ④主なる神が士師のころからの敵を一掃して、ダビデとイスラエルの民に安らぎを与える。

以上のようにここでは、ダビデ個人に対する神の御業が語られています。

次に 11 節後半～16 節で、主なる神がダビデに対して永遠のダビデ王朝を建てることを約束します。つまりダビデ個人への祝福だけでなく、さらにダビデ王朝への祝福が語られるといつてよいのです。ここも箇条書きにします。

- ①「主があなたのために家を興す」つまり、王朝を創設するというのです。
- ②ダビデが死んだ後、ダビデの子孫に王権を継がせ、王国を揺るぎないものとする。
- ③この「子孫」、すなわち「ダビデの子」が、神のための神殿を建て、主なる神は彼の王国の王座を永遠に固く据える。
- ④主なる神は、この「子孫」、すなわち「ダビデの子」の父となり、その者は主なる神の子となるからである。
- ⑤この聖なる親子関係において、主なる神は父として指導するが、サウルにしたように退けることはしない。
- ⑥このようにして、主なる神が建てるあなたの王国とその王座は、永遠に存続する。

以上のように、主なる神は、預言者ナタンに語りました。ナタンはそのとおりにダビデに告げたのです。これが、ダビデ契約、あるいはナタン契約と呼ばれます。実にスケールの大きな契約です。ダビデは当時の世俗国家にならない神殿建設を構想します。しかし主なる神は、永続するダビデ王朝において被造物の世界全体を支配し、いわばダビデ王朝そのものを神殿となさるのです。そのためダビデ契約と共に、ダビデの時代を突き抜けて未来を展望することになります。

もちろんダビデ王以降のイスラエルの歴史をみると、ご存知のように、主なる神に背く王たちが出現します。そのため北イスラエル王国はアッシリア帝国に滅ぼされ、南ユダ王国も、ついに新バビロニア帝国に滅ぼされ、バビロン捕囚の憂き目に遭います。しかし神は、ダビデの契約を廃棄しません。そのためこのダビデ契約に基づいて、メシア待望が産み出され、「ダビデの子」であるメシアを待ち望むようになるのです。

こうして新約聖書において、神の子イエス・キリストが真の「ダビデの子」となり、ダビデ契約を成就するのです。そのためみ使いガブリエルはマリアに次のように告げています。「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」ルカによる福音書 1 章 31～33 節の御言葉です。み使いガブリエルがマリアに語った受胎告知の一部です。ここには明らかにダビデ契約の完全な実現が語られています。したがって主なる神は、神の子であり真のダビデの子であるイエス・キリストを永遠の王とし、この方において、イスラエルとこの世界を御支配してくださるのです。

今日のわたしたちは、そのようなイエス・キリストが教会の頭となってくださっていることを知らされています。主なる神は、今日においても、実に、主イエスを頭とする教会をとおして、世界を御心のままに支配し、導いておられるのです。だから今日のように、第二次世界大戦後の国際秩序が曲がり角に差しかかっている状況の中にあっても、動揺せずに、主なる神を賛美できますし、またそれがこの周囲の世界に対して神を証しすることになります。

【18～29 節】

ダビデは、預言者ナタンをとおして神の言葉を聞き、祈りをささげます。それが 18 節から 29 節までで語られています。「**ダビデ王は主の御前に出て座し**」祈りました。具体的には、王宮から出て「神の箱」が置かれている天幕に行き行って祈った、ということです。

まずダビデは、18～21 節で、自分に対する神の選びを感謝しています。主なる神がダビデとその家を選んで立ててくださっただけでなく、ダビデの家の「**遠い将来にかかわる御言葉まで賜った**」と述べています。すでに触れたように、ダビデ契約は、その時代を越えて未来を開くものなのです。

次に 22～24 節では、ダビデが主なる神の救いの御業を思い返して語っている部分です。出エジプトに代表される主なる神の救いの御業を思い起こし、主なる神が唯一の神であり、またイスラエルの唯一の神の民である述べています。そして救いの御業を一つ一つ語り、「**主よ、更にあなたはあなたの民イスラエルをとこしえに御自分の民として堅く立て、あなた御自身がその神とられた**」と述べています。ダビデ王において、出エジプト・荒野の旅・シナイ契約・約束の地カナンへ定着といった一連の救いの御業が完成したのです。

こうして 25～29 節では、主なる神がダビデに語った約束の言葉を実現してくださるようにとひたすらに祈っています。注目すべきは、28 節で、ダビデは、「**主なる神よ、あなたは神、あなたの御言葉は真実です**」と述べていることです。ダビデが神の言葉が真実であるというのは、この方がこれまで約束を破らず救いをもたらしたからであって、またこれからも神の言葉は、人間の言葉のように変化したり、失われたりすることはないからなのです。

それゆえに、ダビデは、「**あなたが御言葉を賜れば、その祝福によって僕の家はとこしえに祝福されます**」と述べて祈りを終えています。ここには神の言葉に対する全幅の信頼があるのです。人間ダビデは、ただ神の言葉の恵みの働きを受けて生かされる立ち位置にいます。これは、また今日のわたしたちの立ち位置でもあります。わたしたちもまた神が御言葉を御心のままに実現してくださることに希望を置くのです。